

第1部 産業—現状ルポ 1

拝見 宮城の底力

ものづくり進化の先導役

沿岸部を中心に宮城の地に
 甚大な被害をもたらした東日本
 大震災から2年半以上が経過
 した。宮城の真土復興を本
 格化し、県民の生活を安定さ
 せるには、産業が力強く先導
 する役割が重みを増す。復興
 をリードしていくだけの活力
 を宮城の産業は秘めているだ
 ろうか。この特集では、宮城
 の産業が蓄えてきた底力を検
 証していく。3回続きの第1
 部は「現状ルポ」編。県庁の
 若手職員が現場に出向き、企
 業や団体の現況をルポすると
 ともに課題を掘り下げる。そ
 の1回目は、第2次産業にス
 ポットを当て、アルプス電気
 (本社東京の工場を訪ねた。



新技術の開発拠点であるとともに、電子化が進む車載部品などを主力製品として生産しているアルプス電気古川工場

アルプス電気古川工場(大崎市)



近未来の車内空間を想
 を開発拠点と位置付ける
 のインターネットのこの
 像させるコックピット(運
 転席の座席に座り、ハ
 ンドルを握った。画面が
 起動し、運転手の脈拍と
 今日のスケジュールが映
 し出される。体調良好
 「運転に支障なし」。続
 け、目的地までのルー
 トに「案内するか」
 について「案内するか」
 という選択肢が表示。連
 転手の腕に据え付けられ
 た黒い球体に手をかざす
 と、画面が切り替わって
 音楽が再生された。
 SUVではない。宮城県

視察



製造業界の今後などについて話すアルプス電気の天岸取締役技術本部長

世界視野 知力で勝負

「ル事業を統括する天岸
 取締役は「ともに特徴あ
 る人材育成をしてきた
 だ。」「こうした思いから、技
 能の伝承と人材の育成を
 推進するために、北原工
 場敷地内に「ものづくり
 研修所」を設置した。国
 内外の社員の人材育成に
 力を入れるだけでなく、
 と支援物資の調達を第一

「今までは人が機械に
 合わせて動いていた。こ
 れからは機械が人に合わ
 せて動く社会になると
 開発担当者。民生品の開
 む宮城県内において、ア
 ルプス電気は、1960
 次元CGのシミュレーシ
 ョンを使用し、金型の一
 発完動(発完全自動員
 の取り組みを展開し
 的に行っている。
 また、地域内の産業官
 連携などにも積極的に
 ら驚きと感謝をもって迎
 えられた。震災を乗り越
 えたことで、以前よりも
 周囲との関係が良くなっ
 たという。
 また、復旧・復興の
 途上、「宮城県には、県
 民の生活再建に全力で取
 り組んでいきたい。
 社員は、会社へ来れば普
 通の表情で働く。だが仮
 設住宅から通勤する社員
 などは、まだまだ震災前
 の暮らしを取り戻したお
 けではない」と強調する。
 マクロな経済指標の数字
 をみると「景気は緩やか
 かな回復傾向」なぞと
 れるが、それを支えるの
 は現場の一人一人。製造
 業のフロアから、「人は石
 垣の精神を学んだ。宮
 城県情報産業振興室主
 事・大宮由貴

見えてきた課題

「地産地消」。アルプ
 ス電気の天岸取締役技
 術本部長のこの言葉が
 印象的だった。
 人口減少などにより、
 国内の需要は縮小してい
 る。対して、海外マーケ
 ットの拡大の勢いはめま
 ましい。このような環境
 の中、「地産地消」、つ
 まり国内の企業が製造拠
 点を消費地である海外へ
 シフトしていくことは
 やむを得ない流れなのか
 もしれない。
 地域にとって、この流
 れの影響は小さくない。
 アルプス電気のように地
 域に根差した企業は、地
 場企業との関係も深く、
 地域のものづくり産業を
 中心で支えている。こ
 のような企業が地域での活
 動を継続できる環境を整
 備することが、行政の重
 要な役割の一つだろう。
 そのためには、企業が
 この地域で研究開発や生
 産を行うことの優位性を

将来支える人材を育成



ものづくりの現場を熱心に取材する宮城県職員の大宮由貴さん(左)と本間雅也さん

創り出すことが必要だ。
 巨大なマーケットと安価
 な労働力を有する海外に
 対し、宮城は何を強みに
 していくべきだろうか。
 私、「人材」が一つの
 鍵になると感じた。開
 発・設計などに強みを持
 つ人材。高付加価値の製
 品を生産することができ
 る。高度な技術を身につ
 けた人材。将来のものづ
 くりを支える人材を地元
 で育成していかないと。
 れこそが、宮城のものづ
 り産業が継続的に発展
 するための重要な要素と
 対し、宮城は何を強みに
 していくべきだろうか。
 県内製造業の技術革新
 を支える中核的な人材が
 安定的に確保される地
 域。
 このような将来像を目
 指し「宮城の将来ビジョ
 ン」では、産業競争力の
 向上、地域の発展につな
 がる。高度な技術を身につ
 けた人材。将来のものづ
 くりを支える人材を地元
 で育成していかないと。
 シリーズ「拝見 宮城の底力」は
 本年度内に6回の掲載を予定して
 おり、来年3月まで原則として各月
 1日曜日の河北新報に掲載します。
 第2部は「対談」編で、宮城の各産
 業の成長戦略を展望する予定です。
 企画は河北新報社企画事業部、協力
 は宮城県。



すべての家に、いちばんの品質を。

1976年、宮城県亶理町で高度工業化住宅 セキスイハイムの生産を開始。
 以来、東北の皆様にも最善の住まいをお届けするために、テクノロジーを日々進化させながら、
 地域の気候風土にあった家づくりに取り組んできました。
 その家づくりは、設計どおりの安心をお届けするため、天候や作業環境に左右されない
 屋根のある生産工場ではほとんどの行程を行います。
 何十万点に及ぶ部品・部材を、コンピューターで徹底管理し、最大250にもわたる項目を、
 高精度センサーと人の目で1邸1邸チェックし、合格した家だけがお客様に届けられます。
 これまでも、これからも、永く安心で快適な住まいを提供してまいります。



地域とともに、高品質な住まいを。 **セキスイハイム**